

これは、マシュマーがサイド1・・・シャングリラで自らの政策に疑問を持ちアクシズへと帰還し、一兵卒への格下げ願いをハマーンに提出した後の話である。(ZZ18話以降の話と認識して下さい)

マシュマー自身、ハマーンに目をかけて貰ってはいたが、思う様に結果が出せなかった事、そして一人の軍人として自分の考えがいかに甘いものであったかを、昔ならともかく今は嫌という程理解していた。彼が理想とする「騎士道精神」は、言ってしまうえば相手がそれを尊重してくれなければ、全く無意味な事なのだ。同じ考え、同じ理念を持つてなければ成立し得ない事を、彼はシャングリラ

での政策を実行してみても、嫌という程味わったのである。殴る気である者を殴らない様に更生させる為には、殴ると言う行為がいかに悪い事かを理解して貰わなければならないのだが、それを正当な行為として何の疑いも無く行使している者にとっては、それを理解させる為には物事の根本的な事から説明しなければならぬ事に等しい事であった。

判らない・・・いや、判ろうとはしない者に判らせるという行為は、マシュマーが思っていたよりも遙かに時間がかかる事を、彼は身をもって知ったのである。それを踏まえて、自分は一体これからどうすればいいのか・・・悩みに悩んだ末、彼が出した結論は、ハマーンに対しての自分の階級の降格という申請だった。そして職場を部下のゴットンに任せた後、アクシズへと帰還して指示を待っていた。そこからこの物語は始まる。

\*

\*

\*

ハマーンの個室へと呼ばれたマシユマーは、部屋に入るなり、余りの不甲斐ない自分故にハマーンをまともに見る事すら出来ず、ただ膝を落とし彼女の言葉を待つのだった。ハマーンはマシユマーの近くまで歩み寄り、片膝を付き下を向いて微動だにしないマシユマーを見下ろしながら無言でしばらく佇むと、やがて自分の椅子に座った。そのまま何も語らない時間がしばらくの間流れた。

拷問のような時間がどれ位続いただろうか。やがてハマーンがそつと優しい口調で話し始めた。

「顔を上げるがよい。マシユマー」

「はっ。はいっ！」

マシユマーの表情は青白く、何か思い詰めたような表情をしていた。

「お前からの報告書、そして嘆願書は読んだよ。シャングリラコロニーではお前が考えていた理想と現実のギャップの大きさに随分と苦労した様だな」

「はい。私は最初はどんな人間でも話し合えば解り合えると思っていましたし、その思いは今でも変わらないのですが、それを実行するというのは一筋縄ではいかないという事を、身をもって知った次第です。確かにこれから5年、10年と時間をかければそれも可能でしょう。だが、私も士官である身ですから、アクシズ・・・いやネオ・ジオンにそれだけの手間をかける時間が無いと言う事も十分に理解しております。それ故私は自らの限界を悟り、ハマーン様に今後の進退を委ねる事とした次第です」

「なる程、お前の意思是良く判った。でお前自身としては自分の処遇をどうして欲しいと思っっているの

だ？」

「はっ。職場放棄、軍令無視という次第なので降格が望ましいかと……」

その言葉に、ハマーンはしばらく無言で佇むと、再び椅子に座って話し始めた。

「マシユマー……。私はお前が理想とする『騎士道精神』が現実にはぐわなない甘い考えだと判りつつも、あえてシャングリコロニーへと派遣したのは、確かに人材不足と言う事もあるのだが、そこで現実を見て様々な事を学んで欲しいと思ったからなのだよ」

「はい……」

「私がお前に言った様々な助言……覚えているか？」

「はい。今でも全て一字一句全て覚えています」

「今のお前なら、私の言った意味の真意が判るだろう？」

「はい。痛い程……良く判ります」

「そうか。それなら私がお前を派遣した意義があったという事だよ。それならばお前が私に進退を問う理由は無い。安心して持ち場に戻るがいい」

「はっ。ありがとうございます」

その言葉を聞くと、ハマーンは椅子から立ち上がりその場を去ろうとした。その時マシユマーが、再び口を開いた。

「ハマーン様。それを踏まえた上で、是非お願いしたい事があるのですが……よろしいでしょうか？」

その言葉に、ハマーンは最初軽くやり過ぎそうとしたのだったが、彼の今までに無い真剣な表情を見

て、再び椅子に腰を下ろした。

「話してみるがいい」

「はっ。ハマーン様が私が理想とする『騎士道精神』に一定の理解を示して下さっていた事に関しては、本当に感謝しております。今後はそれをあえて封印した上でハマーン様の命令に従い、出来る限りの事をしてネオ・ジオンを名実共に最高の集団にしていきたく思っております」

「ふふっ。そう気張らなくても良い。それを考えるのが私の役目だ。お前達は前線で最善の行動を行えばそれでいいのだよ」

「はい。仰る通りです。でも、その私がハマーン様の意のままに動けない・・・いや、私がハマーン様の命令に忠実に実行出来ないとしたら・・・どうなのでしょう？」

その言葉に、一瞬眉を潜めるハマーン。

「何が言いたい？マッシュマー？」

マッシュマーは一呼吸置いた後に、静かに話し始めた。

「私は、ハマーン様を最初に見た時から、ずっと憧れの存在として見てきました。例えハマーン様的心中に別の男の存在があろうとも、私の想いは変わる事はありませんし、頂いたバラは今でも宝物として持ち歩いてます」

「・・・」

「そんな私であるが故に、私がハマーン様の指示される行動を忠実に遂行出来ないと言う事は、とても耐えがたい事であり、先程も申し上げましたが、それを学んでいる時間も無いというのが現状です。そ

れ故に・・・私めからハマーン様には是非お願いしたい事があります」

一瞬の沈黙が流れた。

「私を・・・強化人間にして下さい」

その言葉に、ハマーンは一瞬言葉を詰まらせたが、呼吸を整えるところ言い放った。

「それは本気で言っているのか？マッシュマー？」

「嘘や冗談で言える事ではありません。今後も士官として任務に就くのならば、私の取るべき道はどんなのかと、待機中に考えに考え抜いた結果の結論です」

「それは、強化人間になった際のリスクを判って言っているのか？」

「もちろんです。私の持つ感受性の強さや優しさ、そして性欲までも全て無くなってしまおうでしょうし、一度強化人間になってしまえば、元の自分の性格には戻れないという事も・・・充分理解してます」

「それを判っていないながら・・・何故強化人間になりたいなどと言うのだ！お前の長所であるその優しい性格を失う事になるのだぞ！」

「時代がそれを待ってくれない事は、ハマーン様が嫌と言う程知っておられる筈です。それをハマーン様一人に全てを背負わせる訳にはいきません。それがハマーン様を思い、支えたいとする私の考えなのです」

そこまで自分で結論を出しているマッシュマーに対して、ハマーンがそれを拒否する事は出来なかった。仮にその提案を拒否した場合、マッシュマーの性格から言って自ら命を絶つ事はしないまでも、軍人としては全く使い物にならなくなるだろう事が容易に想像出来た。それを踏まえて、ハマーンはこう言った。

「判った。お前がそこまで言うのなら私が拒む理由は無。すぐその準備に取り掛からせる」

「はっ」

「もう一度聞く。覚悟はいいのだな？」

「はい。この命、ハマーン様の為に・・・捧げる覚悟でございます。今更迷う事ありません」

「・・・」

その時、マシユマーを見下ろしていたハマーンに、ふと小悪魔的な思いがよぎった。

「マシユマー。お前に一つ訪ねたい事があるのだが・・・いいか？」

「な・・・何でしょうか？ハマーン様」

「先程、お前は強化人間になると感受性や優しさ、性欲を失うといったが・・・お前にも性欲というものはあるのか？」

その瞬間、マシユマーは顔を赤くして答えた。

「せつ・・・性欲ですか!？」

「ああ、そうだ」

「何故急にそのような質問を・・・なされるのですか!？」

マシユマーは少し動揺しながら言った。

「特に意味は無い事だ。ただの私の戯れなのだが・・・嫌ならば答えてもいいが・・・」

「ハマーン様の名令とあらばお答え致します・・・」

その直後、マシユマーは更に恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「どうした？お前位顔と性格が良い男性ならば、休暇の時、女性とセックス位はするだろう？」

「セッ！セックスだなんて・・・私は・・・まだ・・・童貞ですし、私の好きな人は・・・ハマーン様だけですから・・・その・・・」

マシユマーは一瞬ためらいながらも、目をつむって思い切った口調で言い放った。

「毎日、ハマーン様のお姿を想像しながら自分を・・・慰めてます！」

その言葉に、ハマーンは嬉しいとも、恥ずかしいともとれるキョトンとした表情をしたが、やがてマシユマーの側に来ると、彼を優しく抱きしめた。

「マシユマー・・・お前の私を思う気持ち・・・良く判った。一人の女性として、とても嬉しく思う」

「ありがとうございます。確かにハマーン様には心に秘めた男性がいる事でしょうが、私の愛する人は世界でただ一人・・・ハマーン様だけです」

その言葉に、シャアがミネバと共に去ってから男性と肌を重ねていなかったハマーンの中に、ドロツとした性欲の塊が疼くのだった。シャアに調教され尽くし、開発され切った体には一端火が入った疼きを止める術は無かった。

「ハマーン様。どうされました？」

マシユマーが不思議そうに訪ねた。その時ハマーンは自分の中の理性と欲望の中で葛藤していたのだが、堪らずにこう言うのだった。

「マシユマー。強化人間に志願したお前へのせめてもの褒美を授けようと思う。今から三十分後に私のプライベートルームまで来るがいい。いいか、一人で来るのだぞ」

「はっ。了解しました。ハマーン様！」

いつもの様に、元気に答えるマシユマーだった。

\*

\*

\*

その後、これから起こる事を何も予想してない様な脳天気な表情を浮かべたマシユマーが、一張羅のスーツを着てハマーンのプライベートルームの前に歩いて来た。

マシユマーの想像では手にキスを許して頂けるか、自分の大事な持ち物を譲って頂けるものとはばかり思っていた。やがてドアの前まで来てインターホン越しに少し緊張しながら声を発した。

「ハマーン様、マシユマー・セロです。ご命令通り参りました」

「周りに人はいるのか？」

「おりません。私一人であります」

「判った・・・入るがいい」

ハマーンがインターホン越しにそう答えると、ドアが開いた。ドアは気密保持の為二重になっており、まだハマーンの顔は見えないのだが、マシユマーの頭の中では優しく微笑むハマーンの姿が次から次へと妄想されていた。

「マシユマー・セロ、入ります」

そう言って一つ目のドアを入り、二つ目のドアが開くのを待っているマシユマーだったが、一向に開

く気配が無かった。彼が不思議そうに思っただけで立っていると、再び二つ目のドアの脇にあるインターホンからハマーンの声が聞こえてきた。

「マシユマー、これが最後の問いかけだ。お前が強化人間になり私の為に尽くしたいという事・・・今一度考え直す気は無いか？」

その言葉にマシユマーは毅然と応えた。

「なっ・・・今更何をおっしゃるんですか！確かに平和な世の中に生まれてきたのなら後悔致しましょう。でも今は戦時中なのです！ハマーン様ともあるうお方が、私ごときを使い捨て出来なくて一体何の指導者でありましょうぞ！私が目指す騎士道精神は、必ずや後の世で誰かが受け継いでくれる・・・そう信じてます」

しばらくの沈黙の時間が流れた。やがて再びハマーンの声が聞こえてきた。

「判った。私はお前に甘いと言われるかも知れないが、お前の持っている優しい心が好きなのだよ。だから・・・なるべくならその心を失って欲しくは無いと思っている。だがお前がそこまで覚悟を決めているのなら、もう何も言うまい。これからは戦場の駒の一つと扱う事にするよ。いいか、後悔だけはするでないぞ」

「はっ」

「では、お前の覚悟に対して私なりの褒美を送る事にする」

その瞬間、一つ目のドアがロックされて、二つ目のドアが開いた。

「失礼しま・・・」

マシユマーの言葉が途切れたのも無理は無かった。かなり広い部屋ではあったが数メートル先においてベッドに腰をかけているハマーンは、湯上がり後にバスローブを巻いた様な姿であり、髪型も先程までのおかつぱ頭では無くショートヘアになっていた。その為か、いつもよりも更に大人びた印象を醸し出していた。また、その脇にはハマーンよりも髪の毛のピンク色が薄く、やや肌が褐色系の女性が、全裸に首輪を付けて縄掛けした姿で膝を付いていた。恥ずかしさの余りか顔は真っ赤になっており、うつつすらと涙目になっているようにも見えた。

「ハ・・・ハマーン様・・・これは一体・・・私はハマーン様の性癖に関しては個人的な事なので何も申しませんが、今回は褒美を頂けるという事で呼ばれた筈では・・・」

「この光景を見てもそう答えるとは・・・お前らしいな・・・マシユマー。褒美が私では・・・不満か？」

「褒美が・・・ハマーン様・・・？という事は・・・まさか・・・!!」

「ふふっ、男と女が裸でする事と言えば決まっておるだろう？そういう事だ。お前の覚悟の強さに対するものと言えば、私にはこれ位しか思い付かなかったからな。先程のお前の話だと経験が無いという事だったが、どうやら本当の様だな」

「はい・・・」

「なら、私が全て導いてやろう。まずはシャワー室で体を洗ってくるのだな」

ハマーンはそう言うと、忘れていたと言う様な感じで付け加えた。

「そうそう。お前はこの娘の事は見覚えがあるか？マシユマー？近くへ来てよく見てみるがいい」

マシユマーはその全裸で縄掛けされた女性を見ない様にしていたのだが、良く見ると、見覚えがある女性だった事に気付いた。

「おっ・・・お前は・・・イリア・・・イリア・パズム少尉！」

その瞬間、イリアは顔を手で隠そうとしたが、ハマーンに首輪に付いている手綱を引っ張られた。

「誰が顔を隠して良いと言った?!」

「すっ・・・すみません！ハマーン様。余りの恥ずかしさの余りつい・・・」

「・・・まあいい。で、マシユマー。お前が強化人間になった際には、こいつをお前の下に付ける。その為の顔合わせも兼ねて呼んでおいたのだよ」

「私の・・・下に・・・ですか？」

「ああ、そうだ。実は以前からこの娘はお前の部下になりたいと、ずっと志願しておったのだ」

「こんな私の・・・部下に・・・ですか？」

「まあ、それはこいつに直接話させる方が良いでしょう」

ハマーンは。手綱を少し引き、イリアに話す様に促した。恥ずかしそうな表情のまま目を横にそらしながら言った。

「私・・・イリア・パズムは、初めてマシユマー様を見た時から、いつかこのお方の側で共に戦う事が出来たらとずっと思っておりました。それに私が初めて経験する相手は・・・マシユマー様でありたいとずっと思っただけだったので、ハマーン様に調教を受けている間も決して前の穴だけはとお許しを願っておりまして」

そう言うと、イリアは体を横に向けた。するとお尻の部分から立派な尻尾が生えており、そこにバイブが挿入されている事が容易に想像出来た。その光景を見つつ、ハマーンがこう付け加えた。

「色恋沙汰に疎いお前は気付かなかったようだが、こうやってお前を慕っていた女性・・・いや今は雌犬以下だが・・・もいるのだぞ。マシユマー、お前が私を想ってくれる事はとても嬉しい事だよ。だが、それによって陰で悲しむものもまたいるという事を覚えておくが良い」

「は・・・はい」

目のやり場に困りながらも、マシユマーは敬礼しながら答えた。それを見つつハマーンは話を続けた。

「しかし・・・イリア・・・目の前でマシユマーと私の行為を見るとするのは、お前にとっては辛い事になるが・・・耐えられるのか？」

「ハマーン様・・・普段ならともかく、今の私はハマーン様の忠実な雌犬です。拒否する理由がどこに有りましようか？それに私がお慕いするハマーン様がマシユマー様の初めての女性となるのでしたら、私は心からお喜び申し上げます」

「ふふっ、お前は本当に良く出来た雌犬だよ。お礼にマシユマーの体を綺麗に洗う事を許そう。もちろん大切な部分は念入りに洗うのだぞ」

軽く頭をなでるハマーン。それに対して嬉しそうに答えるイリア。

「はい。ハマーン様」

イリアは自ら首輪を外し、お尻に入れてあるバイブから尻尾の部分だけを取り外すと、マシユマーの方へ歩み寄り手を取ってシャワー室へと案内するのだった。

\* \* \*

シャワー室に入り、裸になったマシュマーは、縄掛け姿のイリアを少し見ても視線を外す様な感じで股間を押さえて佇んでいた。すると、シャワーのお湯を調整したイリアに誘われるままに手を引かれ、彼女に体を丁寧に洗われるのだった。

「イリア・・・その・・・私の為にこんな事までさせて・・・すまん・・・」

「マシュマー様。気になさらないで下さい。これは私が望んで行っている様なものですから」

「望んでって・・・こんな・・・何というか・・・その変態のような姿をして・・・」

その瞬間、イリアがマシュマーにもたれ掛かった。

「ああっ・・・マシュマー様・・・もう一度私を・・・『変態』とおっしゃって下さい。その言葉・・・とっても心に響いて・・・感じるのです。お願いします・・・マシュマー様・・・」

「・・・変態」

「ああっ・・・いいっ！もつと、もつと蔑んだ声で言って下さいまし！」

「この変態！淫乱！・・・雌犬！」

「あ・・・マシュマー様・・・愛してます」

そう言いつつ、マシュマーに抱きつき彼の唇を奪うイリア。シャワーが床に転がり噴水状態になっていた。そうしているとマシュマーのペニスが少しずつ大きくなってきた。

「マシユマー様。私はこうやってマシユマー様に尽くす事が出来れば幸せなのです。ですから・・・今はとても幸せです・・・ああっ」

「イリア・・・その・・・」

「マシユマー様・・・こんな私の事・・・お嫌いですか？」

「そんな事では無くてだな・・・何というか、私はこういう事は初めてなので・・・その・・・どう接して良いのか・・・判らないのだ・・・。情けない話だがな・・・」

「そんな事ありませんわ。誰でも初めてという事はある訳ですし、私はハマーン様よりも先にマシユマー様の肌に触れる事が出来て、今はとても幸せです。あんっ・・・」

そう言いつつ、マシユマーのうなじから首、胸、へそと舐め回すイリア。そして、ペニスを両手で優しく掴むと、そっと口に含んだ。驚くマシユマー。

「イリア！そこは・・・」

「私が口で綺麗にして差し上げます。マシユマー様は力を抜いて楽にして下さいませ」

そう言いつつ、亀頭の前から裏側の部分までを丁寧の下でなめ回すイリア。今まで受けた事が無い感覚に、マシユマーは少し腰を引き気味になるのだったが、イリアはそんなマシユマーのペニスをとても愛おしい様にしゃぶり始めた。

「うっ・・・ああっ・・・」

余りの快楽に、壁にもたれ掛かるマシユマー。どの位そんな時間が続いた事であろうか。やがて、マシユマーが弱々しい声をあげてイリアの頭を両手で掴んだ。

「や・・・それ以上されると・・・ああっ・・・出て・・・しまう」

その声を聴くや否や、イリアは今までよりも激しくマシユマーのペニスをしゃぶるのだった。左手はアナルの手前を摩りながら強弱を付けて・・・。やがてマシユマーは顔を大きくのけぞらせたかと思うと小刻みな痙攣を迎え、ペニスからイリアの口の中に溢れんばかりのミルクを発射した。声にならない声を上げるマシユマー。そして全身の力が抜けるとその場へ、へたり込んでしまった。

「マシユマー様・・・大丈夫ですか？」

心配そうに声を掛けるイリア。

「ああ・・・こんな事は経験した事が無かったので・・・その・・・凄く・・・感じた・・・よ」

恥ずかしそうに言い放つマシユマーのペニスの先からは、まだピクピクしながらミルクを垂らしていた。それを見たイリアは、とても愛おしそうにペニスを再び掴むと垂れたミルクを綺麗に舐め取り、尿道に残っているものまで吸い出した。射精後の状態だったので、その行動に身もだえるマシユマー。

「あっ・・・イリア・・・その・・・」

そんな事はお構いなしにペニスに絡み付くイリアだったが、一通り終わると再びマシユマーにシャワーを当て、全身をボディシャンプーで綺麗にした後、生えつばなしだったアンダーヘアを少し短めに刈り揃えた。不思議に思い、訪ねるマシユマー。

「どうして、そんな事を・・・」

「ああ、これですね。これは、ハマーン様が・・・その下半身の毛を全部剃っておられる方で・・・相手の方も全部剃っていた方がぴったりと密着出来てより気持ち良いとかで・・・でも全部剃るとい

もマシユマー様としてもお困りでしょうから・・・」

「心配御無用だ。このマシユマー、ハマーン様がツルツルに剃ったペニスが好きというならば、遠慮無く全部剃ってくれて構わんよ。人に見せる訳でも無いし、何の問題があるというのだ」

「わ・・・判りました・・・それでは・・・動かないでじっとしてて下さいませ」

イリアは、シェービングクリームの様なものをマシユマーのペニス周りに塗ると、左手でペニスを掴みながら、丁寧に、深剃りをして血を出さない様に剃っていった。だんだんと下半身の毛が剃られていき、子供の様になっていくペニスをみてマシユマーが呟いた。

「これはこれで・・・変な感じがして・・・興奮するものだな」

「ふふ・・・マシユマー様だったら・・・あ・・・でも下半身は正直ですわね・・・」

彼のペニスは再び大きく変化出来た。やがてペニス周りからお尻にかけての毛をすっかり剃られたマシユマーは脱衣所に移動してイリアにタオルで全身を拭かれた後、何も身につけない姿でハマーンがいる部屋へと移動した。

\*

\*

\*

マシユマーがハマーンのいる部屋へ入ると、彼女はベッドにバスタオルを巻いたまま横になって彼を見付けていた。やがて上半身を起こしたハマーンがマシユマーに話しかけた。

「ふふっ・・・毛を全部剃ったのだな？」

「はい！ハマーン様がそれをお好きというのであれば、私は喜んで剃らせて頂きます」

直立不動の状態になりながら答えるマシユマー。

「毛が一本も生えて無くて、まるで子供の様だが、それにしても立派なペニスが生えていて元気に上を向いているものだな。マシユマー？」

「もっ、申し訳ありません！」

「いや、こんな立派なモノを持っているなら、もっと早くお前を誘えば良かったと思ったのだよ」

「き・・・恐縮です」

「まあいい。それとシャワー室での光景は、このモニターで全部見させてもらったよ」

マシユマーの顔がみるみる赤くなった。更に話を続けるハマーン。

「イリアの奉仕に耐え切れなくなって出してしまったみたいだったが・・・そんなに彼女のフェラが良かったのかい？」

「あ・・・いえ・・・私は経験が無かったものですから、良かったか悪かったかはその・・・判らないというのが本当の話で・・・あります」

「では、ミルクが出る瞬間はどんな感じだった？」

「はっ、腰から・・・頭まで・・・電気が走った様な・・・一瞬真っ白になって何も考えられない様な感じ・・・になりました」

「そうか・・・では、もう一度その感覚を味わってもらおうぞ。その前に・・・イリア。お前はベッドの脇に座って、私とマシユマーの行為を見てるがいい」

「はい。ハマーン様」

再びアナルバイブに尻尾を付けたイリアが、ベッドの脇で正座した姿で答えた。

「淫乱なお前がセックスの現場を目の前で見せられて我慢出来るとは思えないが、万が一最後まで耐える事が出来たら、その時は自分で自分を慰める事を許すとするよ」

「あ、ありがとうございます。ハマーン様」

「ふふつ、お前の好きなマシユマーの童貞が、目の前で私に奪われる訳だが・・・本当にいいのか？」

「はい、私の愛するマシユマー様が、私の尊敬するハマーン様と結ばれる訳ですから・・・私としてはとつても嬉しいです。その為のお手伝いも出来ましたし、ミルクも・・・沢山頂きましたから・・・」

「ふふつ、判った・・・では、始めるとするか・・・マシユマー・・・来るがいい」

そう言ってハマーンはマシユマーにベッドへ来る様に手招きした。やや緊張気味に膝を付いた様な状態でベッドへ上がりハマーンの下へ貼っていくマシユマー。ハマーンは薄笑いを浮かべながら、優しくこう言うのだった。

「さあ、まずは私のバスタオルを優しく取ってくれないか？」

「は・・・はい」

言われるまま、そつとハマーンのバスタオルを取るマシユマー。そこには夢にまで見たハマーンの美しい裸が見えた。張りのある美しい胸、キュッと締まった腰、そしてお尻から太ももにかけての魅力的なラインは、イリアの裸よりも更に強烈にマシユマーの目に焼き付いた。思わず唾を飲み込むマシユマー。鼓動が激しく響き、それと共に興奮度も更に高まっていった。

「ふふっ？どうした？まだ私の裸を見ただけではないか。さっ、お前の肌の温もりを私に感じさせておくれ」

そう言つてマシユマーに絡みつくどベッドに深く沈み込み、熱いキスを交わすハマーン。目の前に目をつむり抱き付きながらキスをするハマーンがいる。そんな光景を何度と無く妄想した事マシユマーだったが、今ようやくそれが実現したのだ。唇を離れた時、ハマーンの熱い吐息がマシユマーの頬をかすめた。実は彼同様に、ハマーンもイリアとマシユマーのシャワー室での行為を見て少なからず興奮していたのだ。気丈夫に見せて隠してはいたのだが、いざ行為に及ぶとその歯止めは効かなくなっていた。

「マシユマー。女性の扱いはあくまでも優しくが基本だぞ」

「はい」

「では私の性感帯である耳の裏から、首筋、そして胸へと優しく舐めて感じさせておくれ。その際は強弱を付けてもいいし手を併用してもいい。あくまでも相手を思いやりながら優しくが基本だよ」

「判りました」

そう答えるとマシユマーは多少ぎこちないながらも、精一杯ハマーンの期待に応えようと優しく肌を舐め、触り、そして吸うのだった。その行為に最初は気持ち良いだけの状態だったハマーンだが、首筋にまで行為が及ぶ頃には、よがり声を洩らすまでに興奮していた。

「ああっ・・・そこ・・・いい・・・もつと、もつとお願い・・・」

ハマーンもまたマシユマーを優しく触り始めた。お互いが理性をかなぐり捨てて淫乱に、だがあくま

でも優しくまさぐり合う二人。やがて全身にうつすらと汗をかいてきたハマーンがマシユマーにこう囁いた。

「右手を、そつと下に・・・」

「はい・・・」

ハマーンの下半身は剃毛処理を行っているので、割と簡単にクリトリスに触る事が出来た。

「そう・・・そこを優しく撫でて・・・」

「こんな感じ・・・ですか？」

「んっ・・・そう、ゆっくりとこねくり回す様に・・・敏感な所だから・・・丁寧に・・・」

「はい。ハマーン様」

「あっ・・・いい・・・そのまま続けて・・・」

快樂の波がハマーンの全身を貫いていた。腰をくねらして妖艶な姿で悶えるハマーン。更にマシユマーにそつと囁いた。

「そのまま優しく回りも撫で回して・・・そう・・・下へ手を伸ばして・・・中に指を入れてもいいから・・・そう・・・そのまま周りを捏ねくり回して・・・うん・・・あっ・・・ああっ・・・」

軽く絶頂感を迎えてしまうハマーン。マシユマーは慌てて手をヴァギナから離れたが、それを見たハマーンがそつと囁いた。

「自分の手を舐めてごらん」

「はい」

「どうだい？」

「は・・・ハマーン様の味がします。甘酸っぱい様な何というか・・・」

「ふふっ、それが女の味だ。では・・・この部分をお前の口で奉仕しておくれ・・・」

ハマーンはそう言うと、マシユマーに向けてM字に足を開いた。

「お前のペニスもそうだが、私のここも、他の部分に比べればグロテスクではあるな。だがな、マシユマー、それを持っているのが人間というものなのだ。もちろんそれだけを追い求める俗物では困るがな」

「はい。ハマーン様」

マシユマーはそう答えると、ハマーンのクリトリスにそつと口付けをした後、その部分から小陰唇、ヴァギナ付近までを丁寧に嘗め回した。彼は時折溢れそうになるハマーンの蜜を美味しそうに飲み込みながら、手は胸や腰太もも辺りを優しく撫で回していた。ハマーンのあえぎ声が部屋に響き渡る。やがて、叫び声とも付かない様な声をあげたかと思うと、ハマーンの体が腰を浮かした状態で小刻みに震え、快楽の絶頂を迎えた。顔が赤く火照り恥ずかしそうな表情をするハマーン。

「はぁ・・・はぁ・・・マシユマー・・・今の私はお前をとて愛しく思っているよ」

「私ものです。ハマーン様」

「今だけでいい。ハマーンと呼び捨てでよんでくれないか？」

「判りました。ハマーン・・・愛しています」

「そろそろ・・・」

いつもは見せない様な淫らで淫乱な表情をしながら下半身にマシユマーのペニスを欲するハマーン。

「はい」

彼は、ハマーンにヴァギナにペニスを合わせると、ハマーンの太ももに手を回しながらゆっくりと挿入しようとした。だが位置がずれて入り損ねた為ハマーンが手で挿入を手伝った。

「そう、そこで・・・もう濡れてるから入る筈・・・ん・・・ああっ！」

マシユマーのペニスが、ハマーンの中にゆっくりと収まっていった。そして二人はそのまましっかりと抱き合い、濃厚なキスをするのだった。

「どうだ？私の中は・・・？」

ハマーンが、やや声を裏返らせながら言った。

「暖かくて・・・それでいて私のモノに絡んでくる様な・・・とっても気持ちがいいです・・・」

「ふふっ、私はそういう風に訓練されたからな・・・ご主人様を常に喜ばさなければならなかったよ」

「そのご主人様というのは・・・やはりシヤア様・・・なのですか？」

「ああ・・・。だがお前も知っての通り振られてしまったがな・・・ふふっ、無粋な男の名を出して悪かったな。お詫びに私の中を存分に堪能してくれ」

そう言って、マシユマーにピストン運動を促すハマーン。その最中にマシユマーが快楽を覚えながらも言った。

「でも・・・このままだと、中に出してしまいそうです」

ハマーンはよがりながら答えた。

「いいよ。出しても・・・」

「でも、それだと・・・」

「これでお前との間に子供が出来るなら、それはそういう運命だという事だ。それとも、私との間に子供が出来たらマシユマーは困るのか？」

「いや、そんな事は・・・でも私の様な男との子供など・・・」

弱気な発言にハマーンはキスをした後にこう反論した。

「もつと自分に自信を持つのだマシユマー。私はお前の素質を認めているからこそ、士官に抜擢したし、今回も私の相手として選んだのだ。そうでなければ・・・あんつ、こんな恥ずかしい事を、お前と出来るものか・・・」

「はい、ありがとうございます」

そして、二人はより一層淫らな行為に励む事にした。時折体位を背後位や座位に変えたり騎乗位になったりと、マシユマーがシャワー室で一度射精している為か、かなり様々な体位が繰り広げられた。二人とも全身にうっすらと汗が滲み出しており、そろそろ疲れても良さそうなものであるが、興奮しきっている為か淫らな獣が絡み合う様にひたすら快楽をむさぼり合っていた。

どの位時間が経った頃だろうか、何度目かの正常位を行っていた時、マシユマーが苦しそうな声でこう言い放った。

「そろそろ・・・限界です」

「私ももう少しでイキそう・・・あんつ・・・マシユマー・・・好き！」

「私も・・・とっても・・・ああっ・・・出る！！」

「来て！・・・イクウウウウウ！」

「あああつ！」

二人ともお互いの体をしっかりと抱きしめながら絶頂を迎えていた。やがてマシユマーのペニスから、大量のミルクがハマーンの体内へと放出された。体を痙攣させながら、ぐったりとハマーンに覆い被さるマシユマー。ハマーンも絶頂感による痙攣が収まったらしく体が弛緩していった。

「はぁ・・・はぁ・・・ハマーン・・・様・・・」

「マシユマー・・・とつても・・・気持ち良かったよ」

「ありがとうございます。私も、私が憧れていたハマーン様と・・・」

「今はハマーンでいいと言っただろう？マシユマー」

「すみません。つい・・・私も憧れていたハマーン・・・あなたとこうやって結ばれる事が出来たなんて・・・夢の様です」

「ふふっ、お前が強化人間になるという覚悟を決めて私の元へ来たからだよ。その礼には私もそれなりの礼をもって尽くさねばならない・・・それだけの事だ」

「でも、こんな事をした私が言うのも変な話ですが・・・本当に私と関係を持って宜しかったのですか？」

その言葉に、ハマーンは視線をそつとそらしながら答えた。

「私とて一人の女性だ。時には人肌が恋しくなるし・・・女性同士の絡みではこんな快楽は得られないからな・・・」

そう言って、一端会話を切ったハマーンだったが改めてこう呟いた。

「こういう関係になったお前になら話しても良いだろう。お前も知っての通り私がシャア・アズナブルと恋仲だったが・・・主従契約を結んでいる仲でもあったのだよ」

「主・・・主従契約というと・・・やはり・・・ハマーン様とイリアとの仲のような・・・ですか？」

「そう・・・ご主人様と奴隷という契約さ。もちろん私がシャアに奉仕する立場なのだが・・・彼はサデリストでな。私の穴という穴を徹底的に開発したり、露出プレイやSMプレイなど、ありとあらゆるプレイを私に仕込んだのだ」

「・・・！」

「私がイリアを奴隷として仕込めたのも、今回お前を満足させる事が出来たのも、元はと言えばシャアが全て私に仕込んだ事を実践してるに過ぎないという訳だよ」

「で、シャア様は・・・確かグリプス戦後に保護してここにいた筈でしたが・・・」

「お前がシャングリラに行ってる間、何度か話し合ってはみたのだが、結局私たちの組織には関わり合いたく無いそうだ。それに私の考えに異唱える者どもがミネバ様の拉致、もしくは暗殺をも考えているらしいので、一緒にここを出て行ったよ。殺されるよりなら、彼に預けた方がまだましと言うものだ」

「そ・・・それでは今いるミネバ様は・・・」

「ふっ・・・影武者だよ」

「で、今後は・・・一体どうされるおつもりですか？」

「予定通り地球圏へ艦隊を降下させ、速やかにダカールを占拠する。そしてサイド3の譲渡を認めさせ

る予定だ」

「その後は・・・？」

「その後・・・ふふふっ……。まあ、シヤアがミネバ様を使って上手くやってくれるだろうさ。あいつはそういう男だよ」

「一緒に・・・戦って欲しかったですね」

「ああ・・・彼のカリスマ性が有ると無いとではスペースノイドの反応がまるで違うからな・・・だが、過ぎた事を後悔しても始まらない。そういう気持ちを込めて、私は髪を切ってみたのだが・・・似合うか？」

「はい。いつもの髪型も素敵ですが、この髪型も大人の女性の様でとっても素敵です」

「ふふっ、褒められると嬉しいものだな・・・だが私は人に詮索されるのが嫌なので、普段はいつもの髪型にしてるといふ訳だ」

「すると・・・いつもの髪は・・・」

「そう・・・かつらだよ・・・気付かなかったか？」

「ええ・・・全く・・・というか、私はまともに目すら合わせられませんので・・・いつも胸ばかり見ております」

「そうだったな・・・ふふふっ・・・」

ハマーンはそう答えると、マシユマーをギュッと抱きしめて、濃厚なキスをした。二人はしばらくの間、そのまま一つになった状態で愛を確かめ合っていたが、やがてハマーンがマシユマーにそつと耳打

ちした。

「実は、お前に頼みたい事があるのだが・・・いいか？」

「はい。私に出来る事でしたら・・・」

「ベッドの脇にいるイリアの事なのだが・・・」

小声で話すハマーンに、マシユマーが驚きの声をあげた。

「えっ！そんな事を・・・」

「嫌なのか？」

「いえ、そんな事はありませんが・・・」

「強化人間に関してはまだ未知数の分野が多いのだ。今の内に出来るならやっておいた方がいい。出来るか？」

「はい。私を求める者がいる限り、それに答えるのは当然の理。喜んで努めさせて頂きます」

そう言いつつマシユマーはハマーンのヴァギナからペニスを抜いた。ハマーンはゆっくりと立ち上がり、イリアの前に来ると、股間からマシユマーの精液を太股に垂らしながらこう言い放った。

「私とマシユマーの行為を見て、よく快樂の波に耐えたな。イリア。苦しかったか？」

「はい。ハマーン様とマシユマー様の淫乱なお姿を拝見して、何度手が股間に向かおうとした事か。正に地獄の苦しみを味わいました」

「ん。よく頑張った・・・」

ハマーンはそう言うと、イリアの口にそっと自分の唇を重ねた。そしてこう告げた。

「そんなお前に褒美をあげる事にするよ。これから二十四時間、寝食以外はマシユマーと肌を重ね続け、快楽を追求し続けるのだ。そしてマシユマーの中から一滴残らずミルクを絞り出す事を命じる」

その言葉に、イリアの顔が嬉しそうな表情に変わった。

「ほ・・・本当に良いのですか？ハマーン様」

「ああ、マシユマーも了解してくれたよ。マシユマーにとってはこれが最後のセックスになる可能性もあるので、悔いの無い様に過ごすのだな」

「はい。ありがとうございます！ああっ・・・」

そう言うと、イリアは立ち上がり、マシユマーの懐へと飛び込んでいった。そしてベッドに転がり合いながら、濃厚なキスを交わした。

「マシユマー様・・・ハマーン様にした様に、私の中にも沢山ミルクを注いで下さいまし。ああ・・・好き！大好き！」

「ははっ、イリア・・・まあ時間は沢山有るから・・・うっ・・・」

今まで待たされていた反動の為か、目がトロンとして淫乱な表情になっているイリアの行動は止まらなかった。あつという間にマシユマーのペニスを口に含むイリア。

「これ・・・これが欲しかったの・・・。ああ・・・ペニスからマシユマー様とハマーン様の味がする。

ああ・・・素敵・・・」

「ああ、そこは・・・うっ・・・」

必死に快楽に耐えるマシユマー。それを嬉しそうな、しかし少し寂しそうな目で見ていたハマーンだっ

だが、マシュマーと目が一瞬合った時、我に返ってシャワー室へと去って行くのだった。やがて、シャワー室から出て、バスローブ姿に着替えたハマーンは、ドアの前に立つと快楽をむさぼり合っている二人に向かってこう告げた。

「私は隣の部屋に行って寝る事にするよ。それと、食事は時間になったら目の前に運んでおく様にするから、勝手に食べるがいい。ではな・・・」

ドアを開け、隣の部屋（注：グリップス戦後、シャアが保護されて住んでいた部屋）に移動すると、ドアにロックをしてバスローブを脱ぎ捨て、裸のままベッドの中に入った。そしてまだ残っているシャアの匂いを感じながら、彼を思いつつオナニーにふけるのだった。

こうして、マシュマーにとって夢の様な一日は過ぎていった。そして、後に強化人間として戦線に復帰し、壮絶な最期を遂げたのは歴史が示す通りである。

【完】